

選挙は最大の賭けだ

宇都宮大空襲

(二本立て)



新聞社の応接室で岸総理にお茶を出してくれないかと頼まれて私は東京から田舎に帰った。

私は中学時代から仲の良い真知子さんという同級生がいて、帰省すると良くコーヒーなんか飲んだものだった。昭和三十年頃はそんなものが最高に贅沢だった。ケーキが出る事などなくてコーヒー一杯で充分楽しんだものだった。そんな或る日真知子さんからの呼び出し電話が東京の下宿にかかってきた。「お願いがあるんだけど、岸信介首相にお茶を出してくれない？来週でいいんだけど」「自分でやれば？」と言っただけけれど、「駄目だよ、誰か探してくるようになって言われたんだもの」というので軽く請合った。ひとみの東京嫌いは有名で年中帰省ばかりしている事を真知子は知っていた。家に帰る口実は何んでも良い。口実が無くても帰る。

東京からの帰り、駅に近づいてくると、電車の出口に立って外を眺める。西のかなたに山々が見えるだけで頭の痛いのが消える。孫悟空が頭に嵌められている金冠の箍〔たが〕が緩んでくるように・・・このように東京は私には向かないのだ。理由はなんでもいいのだ。実家に帰って来られれば。彼女からの話に乗ったのは総理大臣にお茶を上げたくて、ではなく口実にしたかっただけだ。そんなたいした事とも思わず引き受け、一度帰って新聞社の人にあい、衣服は制服で良いという事で正式にお受けした。

その前の日帰ってくれば次の日、お茶を差し上げるなんて時間のかかる事ではない。その前の日に帰省して当日の時間など打ち合わせた。総理大臣は県庁、市役所と回って、十一時に此処の新聞社に到着との事で、十時には待機していた。学校の制服だけは入念に手入れをし、真っ白のブラウスを身に着けて待機していた。

どよめきが伝わってくるので窓を開け、外を見たら・・・

新聞社のまわりは日の丸の小旗を持った人の波や警備の警官で埋め尽くされていた。いやいやびっくりした！！！！大変なものだ！！！！

すげえ！！選挙の時以上だ。そうだ、あの時は総理大臣は来なかったもの。これは大変な事を引き受けたものだ、とは思ったものの逃げるわけにはいかない。二階の応接間の隣の控え室に案内されて時を待つうちに外のどよめきで総理のご到着は分かった。

にこやかに岸首相は応接間の椅子にお座りになった。

お茶をのせたお盆を両手にささげ、総理大臣の脇に立ち、一礼してお茶をお勧めした。岸首相は私の方に笑顔を向けて下さった。

黒地に細い白の縞模様のモーニングをお召しになって・・・

後にも先にも総理大臣の目の前に立ったのはこの時だけだ。

でも、何処に隠れていたのか、ひとみが気が付かなかっただけなのか、今のように警護のガードマンは見えなかった。

ひとみ十八歳の春だった。

「何時からだっけ？選挙は・・・」そう聞いたら「もう、始まっていますよ」と芙美子さんは言った。「あれもう始まっていたの？」信じられないほど通りは静かだった。そうだった。選挙でお願いしますという連呼が禁止されたのは随分前の事だった。ひとみが、選挙にかかわった何十年も前の選挙は、お祭りより派手だった。それからずーっとそんな選挙を繰り返し、事務所で食事も出なくなったのは最近の事だ。

世の中も変わったが、一番変わったのは選挙かもしれない。

昔の選挙は

就職難の中、やっと努めた P・X より魅力のあった選挙

やっと学校を卒業したけれど、その頃は就職難で特に女子はなかなか勤め口は見つからなかった。半年以上過ぎてから、立川の米軍基地内にある P X に採用され、ほっとしていたが、此処はアメリカであり、盆暮れとは無縁で日本のお正月休みはない。まさかお正月には帰れると思っていたひとみにとってそれは驚きだった。P X のクリスマスは日本人が想像する以上の華やかさと、信じられないほどの忙しさを売れたものを綺麗に包装し、お飾りのリボンをつけるケーシングという商売がある事も初めて知った。今は日本でもあるが、臨時に出店したそのお店はとても繁盛していた。音楽もクリスマス関連のものに変わり、朝から晩までまるでいつもと違うパーティのような雰囲気だった。何回となく若い G I から付き合いを申し込まれた。向こうの人は断られてもあまり気にするでもなく、平気だった。

日本だったらどんな小僧さんでも女中さんでも暮れいっぱい働けば小使いを貰って新しい着物を着せて貰って実家に帰れるのに . . .

そんな中でお休みを下さいとは云える状態ではなかった。

ひとみの落胆ぶりを見た雇い主は、出勤する前も仕事を終わった後でも良く働いているひとみを気に入っていたので「特別に一週間だけだ」と休暇をくれた。「有難うございます」と繰り返し頭を下げ、その足で飛ぶように田舎へ戻った。寒い盛り、暮も押し詰まっていた。

汽車から降りた駅の前は物凄い雑踏であった。いろんな音が耳に入って来る中で、ひときわ大きく“お願いしまーす”というのが飛び交っていた。迎えに来た父親に「あれ、選挙？」と聞いたら「うん、参議院議員の補欠選なのさ。お陰でうちは拡声器の貸し出しが入って良かったよ。その分は臨時収入だからね。お前、若し良かったらアナウンサーをやってくれないか。貸した所で一人頼まれているんだけど、駄目かい？」父親は田舎の電気屋だった。そうすると一週間では足りない。折角入った P X の勤め口もある事だし . . . でも、ひとみの勤めたところはバンブークラフトコンセッションといって、竹で作った小物ばかりであり面白くはなかった。

竹で作ったコーヒー皿のセットとか、花生けとかが多く、日本人では買わないようなものばかりだった。「どの候補者？」と聞いたら「自由党と社会党の一騎打ちで、横倉さんの頼みさ」「ああ、市会議員している人ね。じゃあ、自由党だ」「そうだ、候補者は黒川義男、社会党は広瀬一郎だ」選挙が一週間で終わってくれば良いが、P X を辞めなければ父親の頼みはきけない。「休みは一週間なんだけど、兎に角行ってみる」と父親に答えた。

その夜のうちに父の友人の横倉さんに会い「よければ泊まり込みなので行ってくれませんか」と云われたが幾らなんでも今日帰って来たばかりなので翌日からにして貰った。その間もいろんな候補者の宣伝カーから“有権者の皆様、夜分お騒がせして申し訳ございません。こちらは〇〇〇〇です。来る投票日には〇〇〇〇をよろしく申し上げます”という叫び声は夜の八時まで続いた。勤務先の社長には親から断って貰った。

翌朝、六時に迎えの車が来て、一通りの身の回り品を持ち、市内の選挙事務所に向かった。選挙でもなければ未だ何処の家も寝静まっている時間だが、到着した事務所内は煌々と明かりがついて、沢山の人達が働いていた。婦人達は頭に手ぬぐいを被り、皆割烹着を着ておにぎりを作っていた。広い事務所内にはおにぎりに巻いた海苔の匂いが充満している。香ばしい焼き魚の匂いもして、それは大皿に幾つも乗せられて一段高いカウンターのようなところに並べられていた。ところどころに鮭の入ったかす汁の大鍋が並び、たくあんや漬物が置いてあり、大きなやかんにはお茶が入っている。そして入って来た人達は、誰に断るでもなくみんな黙って勝手にそれを食べている。此処は大食堂のようだった。迎えに来てくれた人も朝食をとりはじめ、ひとみにもどうぞ、と云った。どれだけの人が食べるのか分からない様な量であたりを見回すと、壁際に祈必勝の大きな紙が贈った人の名前入りで張り出され、その下には何々村後援会一同とか、市長とか町長、誰でも知っている大会社の社長の名前入りの紙が貼り付けられた米俵が所狭しと積み上げてあった。それより多かったのは、後援者から届いたお酒の山だった。米やにも酒屋にもこんなに沢山の量がおいてあるのを見た事はない。何時頃から事務所が開いているのか知らないけれど、これだけの賄いをするには、夜っぴて動いているのではないかと思った。ゆっくりと食事をしている人なんていなかった。食べ終わると直ぐ立ち上がり、消えていった。そこへ迎えの人が「食事終わった？」とやってきた。「組み合わせが決まったのでこっちに来て下さい」・・・お茶を飲んでる時間など無かった。隅のほうの机には中年の男性が一人と可愛い女の子が一人座っていた。市会議員の名刺を出し、「これから直ぐ出発します」と云った。女の子はうぐいす嬢でひとみと交代にアナウンスするという。仕事が朝の8時から夜の8時まで12時間、食事をする時だけ休みでは1人のアナウンサーではもたないので増やされたのがひとみだった。8時からと云われれば8時に出かけると思ったが、全県一区の選挙区では何処其処が8時と指定され、何キロ離れていても其処に到着するのが8時である。毎日違う市町村を回るので、愚図愚図してはいられなかった。

私が東京の勤め口を棒に振って迄選挙にのめりこんだのはこの圧倒的な物量作戦に、こんなにも多くの方がまるで狂おしいまでに熱中するさまに飲み込まれてしまったからと言える。それと本来賭け事は嫌いだと思ってはいたが、選挙ほど大きな賭け事はなく、相場で大きな米やを倒産させてしまったおじいちゃんの資質を受け継いでいたのかもしれない。私は「一週間で必ず帰りますから・・・」という約束で特別に休暇を下さったPXの雇い主の事など綺麗に忘れてしまって毎日候補者と同じ車に乗り、西へ東へと選挙運動に歩いて行った。あのような短期間に集中して全力を投入する仕事はあまりほかにはない。

夜の選挙活動は懐中電灯がなければ仕事にはならず、服装も完全に屋外に出ても良いような支度だった。指揮をする市議員は虫眼鏡と鉛筆と懐中時計を持って広げた地図を見ながら“今何時？ 今何時？”と聞いた。そう その頃は昭和三十年の初めで高級車でもなければ空冷式が殆どで暖かくしようと思ってもそんなに暖かくはなく、車の灯りも今のように明るくはならなかった。空冷式でも暖房が付いていれば有難いほうだった。

ちょっとでも返事が遅れると癩癩を起こした。

「ここは戦場だ！！。候補者の先導係だから遅れるわけにはいかないんだ！！候補者の着く十分前には到着して 演説会がある事をアナウンスして回るのがこの車の役目だ！」と云っていつも地図と睨めっこをしていた。

いくら早くと言っても腕時計は小さいからまごまごする。

そのうち私はいい事を思いついた。長い針のほうが良く見える。

それで “何分 何時”とやった。何分のほうが針が長いから、すぐ目に入る。どっちを先に云っても返事は返事だ。

それから癩癩はなくなった。

この選挙でひとみは最終日、ひとりだけお昼も食わず、候補者を中央に地元出身のただ一人の大臣が右、うぐいす嬢のひとみが左で大きいトラックに立ち 力強く候補者の名前を絶叫しつづけた。

先生方は手を振るだけだ。

今日しかない、休んでなどいられない。

声がかれても水を飲むしかなかった。

負けたら全てが水泡に帰す・・・

お昼頃完全に声はつぶれた。地元のバス会社から応援が来た。

ガイドさんだったがうますぎて 殆ど役に立たなかった。

ガイドふうにやっても選挙の最終日の絶叫の役には立たない。

そのうちつぶれたままで声が出るようになった。あんな声あとも先にも出た事はない。候補者と大臣との必死さがひとみにも乗り移った。一月の寒風吹きすさぶ大寒の日を一日中、三人で・・・

三人共コートも無しで大きなトラックに立ったまま絶叫した。

手を振り続けて“お願いします、お願いしますと・・・”

その時点で声はうぐいすではなくからすになっていた。

その夜八時すぎ、事務所に戻った。事務所の前は大群衆で、偉い先生方がお礼の挨拶をして選挙は終わった。

その後、何回か選挙はやったがこの時の選挙位感動的な選挙はなかった。そしてひとみは虚脱状態になった。この時からひとみは選挙に魅入られて、完全に東京と縁が切れた。

その年は選挙の当たり年で、この後四月には全国で統一地方選挙が行われる事になっていた。この選挙の指揮を務めた痲癩もちの市議員は、ひとみのはしっこいを見て気に入ったらしい。「四月には私の選挙があります。手伝ってくれますか？」どうせ東京にはもう行かない。選挙も短期間だけれどひとみの性（しょう）に合っている。考える事もない。「はい」即答したひとみは春まで父の店を手伝った。

昭和三十四年市議員はうなばら市議会議員の一期目だった。

もうじきに二回目の選挙が始まる。今度の選挙は前の横山地区だけの選挙と違い うなばら市が全市一区で定員四十四名の大選挙で、立候補予定者は七十名にのぼる。

今の議員の誰もが経験した事のない広域の選挙だ。

それまでのうなばらは旧うなばら市と戦後合併した隣接する旧各村の小選挙区から出た市議会議員により構成されていた。

その為今回初めてうなばら市が一選挙区となる大選挙区制になったので、旧各村から立候補する議員達にとっては、皆目見当もつかない真っ暗闇の選挙戦となったのだ。

投票日の前の晩 選挙運動の為に走って行くと何台かの車が追って来て進路を妨害する。危ないので止まったらそのうちの一台から男の人が降りてきて「何処に行くのか」と執拗に聞く。

「そんな・・・何処に行こうと勝手じゃありませんか？」それでも回りを囲んで行かせない。そのうちに運転手が「わかりました」といって車を戻した。「なんでいう事をきくの？どこに行こうと勝手じゃないの？」と云ったが、明日投票日という前の晩が他の区域から買収に来る事が多く、それを阻止する為に一々車を止めさせて、邪魔をするのだ。遅くなればなるほど“げんなま”が飛び交うと云う。

地元の有力者に「今晚来てご覧、所々に焚き火をしながら不寝番が立つから」と言われた。鎬を削って競り合っている敵方の運動員を入れないようにこっちの運動員が夜っぴて立ち、絶対に入れない。運動員が票を買いに行くのは前の晩が一番有効なのだ。まるで映画でも見るような話に興奮しながら行ってみたら本当にかがり火を焚いて、男衆が集まって酒を飲んでいた。

そのようにして道を塞ぐので隣村に行くのに山道を這うようにして山越えをする。この為に又、要所、要所にかがり火を焚いて朝までみな寝ずに立ち、外に票が流れるのを防ぐ。投票日の前の晩が一番怪しく 必死に候補者の関係者が動く。

昔は電話など無かったから、出向いて頼めば何とかあったのかもしれない。田舎は縁戚関係は殆ど分かっているし、派閥も寝返りそうなのも大体分かるのでそこらを重点的に抑えれば買収は出来ない。

選挙は戦争なのだ。特に範囲が小さければ小さいほど激しい争いでありそれが極まれば 何代にもわたってしこりを残す。

しかし あまり刺激のない農村地帯にあっては それもお祭りなのだ。だから村の衆の血が沸き立つのだ。

今の小選挙は党と党の戦いだからそれが一番良い。

このように映画を見るような選挙は、ひとみの関与した八回のうち その時だけでその次の選挙に篝火がたかれることはなかった。

少なくともいくらかずつ近代化していったのだろうと思った。



その日は雨がぼそぼそ降っていた。引っ越した家にもまだなじまず、夜お便所に起きて反対の方に行ってしまった事もある。

丁度、よく寝ついた頃だろうか、何か話し声がしてどうも麗子おばさんらしい。おばさんは秀子ちゃんを背負って「あーあ、疲れた」といいながら、「何か胸騒ぎがしてねえ、来ちゃったのよ」と云っていた。おじさんはNHKに勤務していて、今はパンジェルマシンという所に派遣されている。そしていくらしもないうちにバリバリーンという音がしてみんな起きあがった。大きい子が小さい子の手を引いたり、抱っこをして横穴防空壕へ入る。大体その役は母と上三人だった。

防空壕へ入る時、西のドンドン山の方がパーッと明るくなり、父が大きな声で「誰だーっ、あかりをつけるのはーっ」とどなった。

でも、それはB29の落とした照明弾が炸裂しながら、あたかも花火のように落ちてくる光景だった。みんなはっきり見た。

空爆は下町を壊滅状態にしなが、上町に迫っていた事をあとで聞いた。下町の母の実家の隣に昔からそこに住んでいた一家が防空壕で直撃を喰らい、全滅した事を後になって知った。

麗子おばさんたちはすんでの所で命拾いをしたのだ。

下町の被害は甚大であった。一家全滅もずいぶん耳にした。

ひとみ達の逃げ込んだ防空壕も、若し岩盤でなければ多大なる被害をうけたのだ。殆ど真上に焼夷弾が落ちたのだから。

焼夷弾は爆発して丁度同じ高さになっている我が家の屋根に飛び散り燃え移った。母と姉たちとうちのおばあちゃんがバケツリレーで消し止めた。みんな必死だった。

しばらくして「うちのおばあちゃんはバケツと思って、ふくべ(かんぴょうの実をくり抜いて炭いれにしたもの)を出すんだもの、やんなっちゃうよ」と父が笑って云っていた。

敵機が去ってから外に出、下の街道を、こんな大勢の人見たこともないほど北へ北へと走って行くのを見た。

そして目の前に一面にひろがる、満々と水を湛えたたんぼ一面に、まるで死者の霊を弔うかの如く、飛び散った焼夷弾の油が、何千、何万本の蠟燭の燃えるが如く揺らいでいた光景を、そして、宇都宮の一带が炎につつまれているのを空っぽになったような心でいつまでもいつまでも見ていた。

逃げ場となった東校も爆撃と猛火に包まれてずいぶん犠牲となった。

宇都宮大空襲、一夜明けて その二

ゆうべの空襲の後、明るくなってから父は店を見に、姉のさとみとひろみは学校へ出かけた。ひとみはその日の朝のことはよく覚えている。噂で炊き出しのおにぎりが出るというので行ってみた。何しろ、米のめしには飢えていたから。赤門までは焼けているところは無かったが、赤門近くなると二荒山の他は市内が全部見渡せる焼け野原になっていた。

市内は焼け落ちてあちこちに電信柱が倒れ、電線が入り組んでからまり、水道の水は噴出し、流れているのが見えた。夕べの雨は上がり、どんよりと曇り空だったことだけ印象に残っている。

あれほどの大災害を見たにもかかわらずなんの感慨もなかった。

それほど、空爆は日常茶飯事だった。誰に聞いたかわからないけれど炊き出しは終わった、とのことでそのまま家に帰った。

物凄い衝撃というのは無かった。

自分の家が焼けていない事、空襲のさなかを逃げ惑ったわけではない事が、深い印象に残らなかった原因なのかもしれない。

小学校二年生だった妹は、綺麗な花火のように記憶していると云った。すると、今朝のNHKの放送で三月十日の空襲を、東京にいたけれど、少し離れた所から見ていた人の投書で、矢張り凄いなあと思いつつ綺麗だなあと云うのを聞いた。

湾岸戦争の時もテレビを見る人は、映画を見るように興奮し、他の番組など目に入らなかったのと同じだったと思う。

でも、五年生にもなるともう少し違った。田植えの終わった田んぼの一面にろうそくを灯したように飛び散った油が燃えていたのを、何の思いも無くただ見ていた。何千本もろうそくが燃えていた光景を忘れる事は出来ない。

焼け跡に行った父は駅周辺が跡形も無く焼け落ちて、私達のめしの種、ガラスの電気の笠が焼け跡に飴のように曲がりくねって、まだくすぶっているのを見届けて帰って来た。父にとって、めしの種があのようにあめん棒のようになってしまったのは相当なショックのようであっただけだ。

姉の2人は水浸しの道を通る時、感電しないかと、とても、怖かった事、大通から女学校に曲がった所に友達の家があり、その前を通った時、昨夜の空襲で防空壕に避難していた人達が直撃を受け、一家全滅で、まわりの人達が遺体を掘り出す作業をしていた。

ヌーッと突き出た足は2むしやき“と云う他ないのだろうが、熱の為、身体は膨張し、悲惨極まりなかった。

姉達は女学校へ行く途中、駅前を通った時、沢山の人達が交番のわきに行列し、めいめい手にやかんとかバケツを持って水を汲んでいる所に出会った。

まともな水道はそこ位だったのだろうか。みんな煤だらけでくたびれ果てたようすだった。その中に小料理さんをやっていて、子供心にも大変小粋で美人だと感じていたいく代さんの、あまりにも変わり果てた姿を見た時は、本当に茫然としたと云っていた。顔も手も煤だらけ、おまけに着ているものも、ひどく汚れて・・・尤も他の人もよくよく汚かったのだが、ひときわ美人だった為にひろみの心に焼きついてしまった。

炊き出しは東武の交番のわきで朝のうちに行われたと聞いた。

みんなで話しているのが、それとなく耳に入ったらしいが、その頃、中島飛行場に働きにいてる人がどんどん増えて、東武前の店は自転車預かりが大変に繁盛していた。

ゆうべ夜十一時半頃から始まった空襲は、東の方からだんだん西へ向かって来て今にも足元に迫り来る様子なので、どうせ燃えてしまうのだからと、自転車預かりのおじさん達が、群れをなして西へ、西へと逃げて行く人たちに大声を張り上げ「この自転車に乗って行って下さい、みんな燃えてしまうんだから」と怒鳴ったが、誰一人乗っていかなかった。あめんぼうのように曲がりくねった焼けた自転車の残骸を見て、おじさんが残念そうに云っていたのをよく覚えている、といていた。みんな、空襲なんて、と馬鹿にしていた人も多く、私の父を弱虫だ、と笑う人も多かったそうだが、その、笑った人達はその夜、沢山うちをたよって逃げて来たと言う。

そんな時いつも用意していた貴重品の入った袋など持ち出さず、ヤカんだとかバケツ、お位牌など持って逃げる人が多かったという。

実際その時になると慌てて何も分らなくなるらしい。

お母さんも最後までまだ行かない、と云っていたのを父が無理やり連れて来た。

宇都宮大空襲 一夜明けて その三

宇都宮にどのくらい災害があったか、新聞社も焼けてしまったから詳しい情報は入って来なかったが、宇都宮はほぼ一週間燻って〔くすぶって〕いた。

丁度私の家のあった原眼科の南の家の東の国道〔今のデパート西口〕が焼け止まりで、眼科病院にも火は移ったが、うちでも消火活動をしたようにバケツリレーで消し止めた。

あの国道をさかいに火は上町にはいかなかったが、私たちの行っていた学校は病院の西だが全部燃えてしまった。

でも、次の日帰ったら燃えていなかっただけで、そこで焼け止まりだと発表になったわけではない。この辺の住民は皆、雨にずぶぬれになりながら泣き泣き鶴田のお羽黒山まで逃げ、朝の白むまで其処に隠れていた。

疎開先まで空襲が及ぶなどと父は考えなかった。

被災した幾らかの人は、己の消火活動で消し止めたが、もし、消せたとしても爆撃がひどければ、逃げるほうが先になる。あたら消せる物まで失ってしまった人も多かった。

同級生の吉田めぐみさんの家は二荒山神社の国道を隔てて南、この辺で一番の繁華街の真ん中に、昔から大きな旅館を営んでいた。自宅は旅館の南約百メートルに二百余坪の邸宅があり、万全の構えで空襲に備えていたが、ひとたびB29の編隊に見舞われた時には為す術もなく、落とされた焼夷弾は二十八発、逃げる途中で家族はチリジリバラバラになった。

五年生だっためぐみさんは、家族とはぐれ近くの川にひそんでいた。そして日が昇ってからいまだ消えやらぬ余燼の中を我が家をめざした。家に着いた時はくすぶる市内を無我夢中で歩いた為、履物も焼け焦げて片方の足に大変な大やけどをしていたのに気が付かなかった。逃げる途中の市内はあらゆるところが燃えつくされており、初めて遭遇した空襲の破壊力の大きさに目を見張るばかりだった。「足のやけどは結構酷かったけど、薬もなく自然に治るのをまつほか無かったのよ。だから私の足は右と左大きさが違うのよ」と笑っていた。

ひとみの姉二人は町の真ん中を通過して、材木町から操町の女学校へ通っていたから空襲後の町についてはよく覚えていた。

くすぶっている市内は二荒山を残して一目で見渡せるほどだったが、中にポツンポツンと石の蔵が残っていた。

大谷石の蔵は火に強く類焼は免れたのだと思っていた。

もう、燃えないのだと思っていたが、一週間くらいたってからあちこちの蔵が燃えているのを見た。

多分、蔵の中はまわりの火災で熱を持ち、十分に過熱したところで発火したのではないかと思った、と・・・

見ていると火が入る時は一瞬にして、ポウーッと燃え上がったそうさ。

又あるいは避難していた家族の人達が帰ってきて、蔵だけは助かった、とあけたとたんに酸素が入り瞬時にして火がついたとか・・・

いづれにしてもあの空襲から約一週間であちこちに残って建っていた石の蔵にも火が入り、市内は二荒山神社を残して一望に見渡せるまでになって火災は終わりを告げたと言う。

疎開してから学区が違うからと云う事で転校する事になり、母に連れられ近くの小学校に行った。

「お母さん、元の学校に戻りたい。今の学校はどうしてもいやだ。行かない」と駄々をこね、案外すんなりと母は二部授業になっている小学校に行ってくれた。姉のさとみとひろみは第一女学校だったし、双子の妹は小さかったので何の問題も無かった。

小使室で校長先生にお会いした。二部授業で一つの学校を二倍の先生と生徒が使っているので応接室なんてあるわけない。

母から話を聞くと先生は、しばらく腕組みをして考えていた。

「ひとみさんも知っているでしょうが、毎日のように空襲があります。西校だってこの前の空襲で燃えてしまったからこうして此処にお世話になっているんでしょう？必ず戦争は終わります。ネ？そうしたら、戻りましょう。ね？」と言ったきり黙っている。

母も黙っている。ひとみはしばらく泣いていたが「さあ先生もお忙しいんだから、帰りましょう」と母は娘を促して立たせた。校長先生は「又、戦争が終わったらお会いしましょう。じゃあこれで・・・」と別れた。

校門を出て女学校のほうへ歩いていくと又警報が鳴り出した。確かにこの頃は、連日空襲があった。どうしよう、知っている家は無い。確かにこれでは転校は無理だとひとみも思った。今度は空襲のサイレンに変わった。母は「そうだお産婆さんの家が女学校の方だった」と云うと娘の手を掴んで走り出した。

門構えの立派な家を見つけると駆け込んで「稲葉さん、稲葉さーん」と、大きい声で叫んだ。

「あーらま、奥様」と聞き覚えのある声がして、「早く、早く」と、防空壕へ案内された。この頃の空襲は機銃掃射といってP51という小さな飛行機が人を狙って撃つ。

この前も駅周辺の焼け跡を、勤労奉仕に出ていた中学生が狙われ、急いで交番裏の防空壕に駆け込んだが、もう中は避難の人が一杯でお尻だけ入らなかつたらそこを撃たれて亡くなった。

もう、安全な所なんて日本国中探しても無いくらいだ。

少し経って解除になり、お礼を云ってお産婆さんの家を辞した。

二人共黙って歩いた。二人共転校しなくて良かった、と思っていた。

大通りに差し掛かった頃、又空襲警報のサイレンが鳴り出した。

「一郎さんのうちだっ」と言うと又母は娘の手を掴んで走り出した。

国道を渡って向こう側に一郎さんの家はあり、一郎さんは戦争に行っているが、うちで一緒に育った初っちゃんがお嫁に行っている。

逃げ込んだあとも、けっこう派手な機銃掃射があった。それからひとみは転校の事は言わなくなった。

女学校は三年生になると学校工場といって学校の中でいろいろ作業をやった。

三年、四年、五年とだんだん大変な仕事になり二年生はいくらか楽な仕事で一番上の姉たちは昭和二十年四月に三年生になったから、それからは学校工場になった。

最初は特攻隊の乗る飛行機の前につける風除け、風防ガラスと云ったがそれを、金属の枠にはめてビスで留める作業だった。

今のプラスチックのような物で、その頃風防ガラスの切れ端がでまわっていて板などに何度もこすりつけて匂いを嗅ぐといい香りがした。ひとみ達は皆欲しがったものだ。

あの頃プラスチックなんてなかった。風防ガラスと云った。

この風防ガラス一枚しか遮る物のない、自分一人しか乗れない小さな飛行機に、片道だけの燃料を積んで敵艦に突っこんで行く特攻のことは、日本全国民の知るところだったから、皆どんな思いでそれを組み立てたのだろうか。必死になって真心こめてやるしかなかった。

姉達は、みんな神風の吹く日を信じて待っていた。

いや、日本国中信じて待っていた。

神風よ、吹け。早く、早く・・・・・・・・

その組み立てる為のビスが足りなくて途中で出来なくなってしまったので、飛行場から来ている、女学生に作り方を教える教官にビスが無くて出来ない、と訴えた。「私は教えるだけでそう云う事は分りません。飛行場に行って係りの人に云ったらどうでしょう」と云われたので、姉はもう一人と一緒に歩いて飛行場に出かけた。

自転車なんて無い。運動靴なんて上等な物もない。その頃は履物といえば下駄だった。その下駄履きで女学校から飛行場迄は四キロ、いえその頃で云えば一里以上あった。神風が吹く迄、神風が吹く迄、と念じながら炎天下、さとみと友達の二人は必死に飛行場へ向かって歩いた。そして半分以上も来た時、空襲警報のサイレンが鳴り出した、と思う間もなく、P51の機銃掃射が始まった。その頃、道の両脇に家など少なく畑か草むらだった。逃げる場所を探すだけで必死で草の中、地べたを這いつくばって隠れた。そして、P51が去った後、二人は黙って女学校目指して歩いていた・・・・・・・・

二人共・・・・・・・・黙って・・・・・・・・何も云わず・・・・・・・・

多分その教官は、行っても部品が無い事を知っていたのだと、さとみは云っていた。

その年、女学校一年生の次姉ひろみも機銃掃射を体験した。

普通、空襲はB29が夜、家屋の密集した都市を、高度一万メートル～一万二千メートル位上空で飛来し、爆弾を落とす時は低空になる。そして爆弾やら焼夷弾を雨やあられのごとく落とし、またたく間に市街地を焼け野原にしてしまう。

時々高射砲がB29に向かって射撃をする音が聞こえるが、先ずは音だけで当たっていない事は誰の目にも耳にもはっきりわかっていた。

このように焼け野原となり、ずっと見晴らしがよくなると、再びの空襲ではなく小さな戦闘機P51が飛んできて狙いを定め、ピューッと舞い降りて来て、隠れる所の無い人を撃つ。

ひろみが二荒山付近で焼け跡を整理していた時、機銃掃射に遭った。兎に角避難して、やっと出て来た時見たものは、馬車の上に血だらけになって運ばれる人だった。

さとみとひとみは血まみれになった人を見はしなかったが、機銃掃射を体験した。死なずに済んだ事が不思議なくらいだった。

毎年この日が来ると思い出す・・・

ボソボソと雨の降るうす暗いむし暑い日を・・・

昭和二十年七月十二日夜十一時頃、この時間にやなせの方に爆弾焼夷爆弾が落とされた。あっという間に国鉄宇都宮駅から西に向かったB29の大編隊は、中心部を焼き尽くし、市内を焦土と化して立ち去った。昨日のようでもあり、はるか彼方のようでもある。

七月十二日には、疎開を嫌がる母も父が説得して連れてきていた。

若しも母が嫌がって疎開先に避難していなかったら・・・

母は亡くなっていたかもしれない。爆撃の中を逃げ惑って、遺体も分らずに・・・父に感謝の言葉を一度もかけないで死なせてしまった・・・。